第 12 回目（1994 年 1 月 8 日放送）

【いろはがるた】

なし

【話の内容】

銀行の大切さについての話。移民の時代には銀行がなかった上、お金を貸してくれなかったので頼母子が銀行の代わりだった。子どもを学校に行かせるために、皆、頼母子講をしたものだ。

ヒロの本願寺の話。1889 年（明治 22 年）日本から利口なお坊さんがハワイに来た。木村斎次移民監督官がこの機会にヒロに寺を建てようとした。フロント街（現カメハメハ街）に 460 坪（半エーカー）をハワイ王国から借りて建てた。1902 年にハワイ王国から米布合併後のハワイ県となると土地の契約が切れ、ヒロ本願寺はキラウエアの方に移動した。同じころには、長野県出身の岡部次郎伝道師[1]がヒロ市内やプランテーションのキャンプ内にキリスト教会を作っている時期であった。移民資料館には、建築趣意書があるが、ヒロ本願寺は、本願寺の信者だけでなく他の宗派の人々からの寄付も受け建てられたが、これは仏教という名の下に皆が一つになった運動であったと言えよう。本願寺というよりも在留民みんなのためのお寺となったのだ。お互い様に寄り添って、ハワイ社会を作り上げてきた。

日本の米問題。以前、1 年で三千万ポンドの米がハワイでとれていた。1 千万ポンドをアメリカに送り、残りを日本と中国に送っていた。移民の子供たちはもちろん、現代日本からハワイへやってきた PJ（Pure Japanese）たちに、どれほど HJ（Hawaii Japanese）が日本のことを思ってきたかを知ってもらいたい。例えば、明治 30 年に軍艦浪速がハワイへ来たとき、彼らに対して現地の日本人は 123 ドル 13 セント集め、牛 2 頭、コーヒーが 300 キロ、果物大きな 1 箱送った、ということを艦長が礼状で書いている。カウアイ島ではニワトリ 50 羽、アヒル 60 羽、ゴボウ 180 束を送った。自分たちの生活も苦しい中、祖国にハワイを知ってほしい、祖国に感謝をする気持ち一心でこのような貢献をした。

---

[1] 1889 年にサンフランシスコからハワイへ渡った岡部は、既にメソジストの美山貫一により布教活動がすすめられていたホノルルを避け、ハワイ島ヒロを中心に布教活動を進めた。1890 年にセントラル・ユニオン教会で按手礼を受け、1891 年の日本人教会独立に伴い設立されたヒロ教会の牧師に就任した。（飯田耕二郎（2011）「移民の魁・星名謙一郎のハワイ時代前期―キリスト教伝道師の頃―」『大阪商業大学論集』第 6 巻第 4 号, 27-41 参照。）

ココナツは実がつくまでに 8～9 年かかる。カナカ[2]はそのココナツを何にでも使った。例えば家や服、飲み物食べ物、武器、食器、油、船などである。

「豆で四角でやわらかで、豆腐のような人になれ人」と豆腐屋の社長が言っていた。「持ちつ持たれつ」を忘れず暮らしていきたい。

【曲】

「春の小川」

【サブジェクトタグ】

頼母子　仏教　ヒロ本願寺　軍艦浪速　練習艦隊　岡部次郎

---

[2] Kanaka. ハワイ語で人間の意。後から来た移民たちに対し、先住民であるハワイアンを意味する言葉で使われる。